

佐々木高明 元館長を偲ぶ

二〇一三年四月四日ご逝去 享年八三

須藤健一 民博館長

佐々木高明先生の訃報を耳にしたのは四月のはじめ。昨年九月の特別展の開幕式でお会いしたときにはお顔の色もよく、「漢方がよく合う」と言われて民博よもやま話に花がさいたのに残念でならない。

一九九三年に第二代館長になられた佐々木先生は、それまでの二〇年間「梅棹みんぱく」の真の牽引者として博物館を完成させた民博のご先祖様である。予算折衝で文部省（当時）に出かけるとき、「梅棹さんが道をつけてあるから」と先生はよく口にされた。じつは、官僚との丁々発止の議論で功を奏したのは、佐々木先生の用意周到な説得力であったようだ。

また、民博という新しく無名の文化人類学の研究所の存在を国内外に知らしめたのも佐々木先生の力による。開館の翌年（一九七八年）から二〇年間、特別研究「日本民族文化の源流の比較研究」などを組織された。内外の著名な研究者を招いて数日間にわたり議論を戦わせ、その成果をすぐに刊行する研究運営の手腕が、民博の評価につながったからである。

佐々木先生の研究は、ヒマラヤから日本にいたる壮大な農耕文化論である。一九七一年に『稲

作以前』（日本放送出版協会）を上梓し、縄文時代の西日本に雑穀やイモ類を栽培する農耕文化が存在したと提唱された。これは中尾佐助先生の照葉樹林文化論を発展させたもの。当時、日本列島の農耕は、弥生時代の水田稲作に始まるという説が主流で「異端の学説」と非難された。その数年後から縄文遺跡で穀類が相次いで発掘され、佐々木説は実証されたのである。

照葉樹林文化の「南の道」とともに、北東アジアを起源とする「ナラ林文化」の存在も視野に日本文化重層論を提唱された。これらの研究により、二〇〇四年に「南方熊楠賞」を受賞。その後も名著『稲作以前』の改訂復刊など、日本の基層文化の多重性を描き続け、論集を未完のまま旅立たれたと聞く。まことに無念である。

佐々木先生は「ヤー」と手を挙げて気軽に話しかけられる学者だった。そのお人柄が理系の研究者を巻き込んでアジアを俯瞰する農耕文化論を編みだした源泉だといえる。話を聞いてくれるやさしい人だったが、ときには議論のなかでにわかに語気を強められることもあったので、おっかない先生でもあった。

民博館長退任後、佐々木先生は一九九七年七

月、財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構の初代理事長に就任された。アイヌの人びと主体の文化振興とアイヌ文化が日本の文化の多様性と豊かさを知るうえで極めて重要であると提言された。そして二〇〇八年に、アイヌ民族が先住民として国会決議で認められ、現在アイヌ文化復興の拠点として「国立の博物館」の建設が検討されている。

民博訪問を楽しみに、いつも「みんぱくはどないでつか」とにこやかに声をかけてくださった。先生からの年賀状に「みんぱくを君に託します」とあった。

佐々木先生、ご遺志をうけとめ、元気な民博にしますので安らかにやすみください。



佐々木高明 第二代館長
（提供・千里文化財団）